

「移動薬局」で能登支援

北見に帰還の薬剤師・阿部さん

北見市内で桜町調剤薬局を経営する阿部忍代表(53)が1月18〜22日に能登半島地震の被災地に入り、災害時に薬局の代わりとなる「モバイルファーマシー」(移動薬局)や避難所の衛生管理の支援活動を行った。被災者に必要な薬を届ける難しさを目の当たりにした体験から、電子版「お薬手帳」の活用や、服用薬の情報を携帯電話に保存する備えの大切さを訴えている。

服用薬の把握難航 携帯に情報保存を

北海道薬剤師会は全国の豊富な経験から第一陣に薬剤師会と分担し、3人1組で支援チームを派遣。阿部さんは、東日本大震災で



①輪島市での支援活動を振り返る阿部忍さん
②倒壊した輪島市門前町の家屋(阿部忍さん提供)

備える車で被災者や医療チームに必要な薬を届けた。インフルエンザと新型コロナウイルスの同時流行を防ぐ発熱外来設置に携わったほか、避難所回りをして必要な薬の把握や配送、衛生状況のチェックをした。地震発生直後は、道路環境が悪い上、個人宅や規模な集会所に身を寄せる人も多く「薬を届ける被災者の場所の把握に苦労した」という。寒さから換気への足を踏む避難所では、二



酸化炭素濃度を測定して空気の汚れを可視化して見せた。手指消毒の徹底、トイレのこまめな掃除にも注意を払った。

避難者の多くは、財布と携帯電話を持って避難所に身を寄せていた。持病などで薬の定期的な服用が必要なのは、薬の外見の特徴は覚えていても、薬名や処方量まで記憶していない人が多い。調べようにも、かかりつけの医療機関や薬局が被災した場合は難しくなる。

具体的な対策として、阿部さんは、電子版お薬手帳の活用や、薬局などで渡される効能、用法が書かれた「薬剤情報提供文書」を携帯電話で撮影し、データとして携帯電話に保存しておくことを勧める。

「被災した人がどんな薬を飲んでいたのでか、第三者でも分かる仕組みが必要。不安な人は、備えについて身近な薬剤師に相談してほしい」と呼び掛ける。

(水野薫)